

2024年1月1日 説教「初めに、ことばがあった」

ヨハネの福音書1章1～5節

新年おめでとうございます。今年もよろしく願いいたします。

2024年の御言葉は「神を待ち望め」(詩篇42:5)ですが、元旦である今朝は、ヨハネの福音書1章1～5節を学んでいきます。老使徒ヨハネが記した福音書の冒頭です。他の福音書とは異なる語り出しです。この書には、キリストの誕生の次第は記されていませんが、ここにキリストがこの世にいられたことの意味が、重厚に記されています。



1. 初めからあった方 (1節)

①初めに (1)「初めに、ことばがあった。」

「初めに」と来れば、「神が天と地を創造した」(創世記1:1)とまずは口をついてくるでしょう。なにしろ、聖書の最初の一行なのですから。それにそれは、世界の初めを語っている特別のフレーズなのです。しかし、それと同じほどに覚えられているのが、この聖書箇所です。「初めに、ことばがあった」。「ことば」が「言葉」となっていないところが重要です。口語訳、新共同訳はそのために、「言」として、ふりがなをふっています。それは「ことば」であれ、「言」であれ、訳し尽くしたとはいえないそんな原語なのです。つまり、「ことば」の原語であるロゴス(λογος)は、世界を統制している理性、全てを支配している存在、究極的な神と呼ばれる知性、理性、意志などを示す語だったのです。初めに、そのような存在があったと、ヨハネは、聖霊に導かれて記しました。

②神とともに (1)「ことばは神とともにあった。」

そして、そのロゴスは神(セオス)とともにあったということです。その究極的存在であるロゴスは神とともにあったということは、ロゴスは父なる神とともにあったと言えばわかりやすいでしょう。

③神であった (1)「ことばは神であった。」

直前の文節では、「ロゴスは神とともにあった」というのですから、神ではないのかと思われそうです。ところが、ここに至って、「ロゴスは神であった」と断言されています。となると、ロゴスは父なる神とともにありながら、なおかつ神御自身であると、宣明されていることになります。ここに三位一体なる神が証しされているといえましょう。

2. すべてを造られた方 (2～3節)

①この方は (2)「この方は、初めに神とともにおられた。」

この節ではロゴスを人格化して「この方」と表現しています。そして、「この方」が、初めに神とともにおられた」と伝えられます。つまり、万物の創造前から、この方は父なる神とともにおられたということです。1節の冒頭で述べられた「初めに」と同じ言葉がここに用いられていて、この方は、すべての初めからおられたということが強調されているのです。

②すべてのものは (3)「すべてのものは、この方によって造られた。」
そしてここに至って、この方、ロゴスは創造主ご自身だとわかるのです。「すべてのものは、この方によって造られた」とあるように、創造のみわざにこの方は初めから、全面的に関わっておられたのです。

③この方によらず (3)「造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。」
3節は、2節で述べられたことを、確かめるように言明します。つまり、造られたもので、この方の関与なしにできたものは一つもないということです。天体しかり、地上の海、山、川、植物、動物、そして人間。どれもこれも、この方がお造りになったのです。

3. 主の (4~5節)

①いのちが (4)「この方にいのちがあった。」
それでは「この方」はどのような実体があるのかといった質問がでるでしょう。ここにはその重要な一面が語られます。つまり、「この方にいのちがあった」というのです。ここまでは、観念的で、哲学的な事柄が述べられていると思っていた人に、はっきりとこの方は生きておられる方、いのち(ゾーウェー)を持つ方であるといえます。この方は、いのちのない死んだ方ではないのです。

②人の光であった (4)「このいのちは人の光であった。」
そしてこの方について、さらに発展して述べられます。この方(ロゴス)はいのちを持ち、さらに「人の光(フォース)であった」というのです。灯台は、海を航行する船にとっては、重要な光を放っています。船にとって、その光は目印です。それと同じように、この方は人が方向を見失った時にも、場所を明らかに示してくれるのです。どのように生きたら良いかわからなくなっている人にとっても、救いを差しのべてくれる方なのです。

③光はやみの中に (5)「光はやみのなかに輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。」
光は闇のなかにあって、周りを照らし出します。歩く足許を照らし、進む道を明らかにします。ろうそく一本でも、懐中電灯一つでも、あれば人々の命が救われることがあります。闇がいかにその権勢を誇ろうとしても、光には勝つことができないのです。

以上ここまでで、ことば(ロゴス)は創造主ご自身であり、初めからおられ、いのちを持ち、光である方だということが明らかにされました。

《結論》

2024年、新しい年の初めに、私たちは偉大なる謎かけをされているような感じがいたします。ヨハネの福音書の冒頭を読んできて、それではいったい、ロゴスとはいったい何なのか、誰のことなのかと思うでしょう。推理小説を読んでいるようでもあります。しかし、この問いについて、ヨハネの福音書はじらすことなく、すぐに答えを出してくれます。即ち、1章14節を見ますと、「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。」とあります。ここの「ことば」はロゴスです。つまり「ロゴス」は人となって、私たちと同じ世界に住まわれたということです。もう、誰もがわかったことでありましょう。このロゴスとはイエス・キリストのことです。キリストの誕生物語を書かなかったヨハネは、このような書き出してキリストの誕生の意味を示して福音書を書き始めたのです。

イエス・キリストは創造主であって、世界の始まる前からおられた方だということがわかりました。またこの方が、いのちの源である方であることもわかりました。さらに、イエス・キリストは人の光であって、すべての人を照らし出してくださる方(9節)だということもわかりました。それでは、具体的にはどのように救いの御手をのばしてくださったのかということに興味に移ります。老ヨハネは1章の後半から、それを述べ始めるのです。ヨハネの福音書におけるキリストの人々との出会い、そして主の人々に対する貴重なお言葉、これらは一人一人が読んで確かめていくしかありません。

今朝は新年でもありますから、1節のお言葉から結論をいただきます。「初めに、ことばがあった」という部分です。初めにロゴスなる方がいらっしやうったという、このお言葉は、イエス・キリストは万物に先だって存在して下さっていたということです。一方、私たちは存在していて、迷いやすい者たちです。存在していて、悩み、苦しみやすいものたちです。しかし、存在の根本である方が初めにあってくださったということ、そして存在の根本である方が、私たちと同じ人間のかたちをとって生まれ、生きてくださったということに希望があります。悩むなら、この方を見よ、苦しむならこの方のところに来たれ、であります。

それともう一つ。「ロゴス」は「言葉」ではありませんが、言葉と密接な関係があるということです。というのも天地創造の時に主は「光よ。あれ。」と仰せられました。すると光ができたと創世記1章3節にあります。つまり、神は創造の御業をなさる時に、言葉を用いておられるということです。主なる神は言葉の本質にあたるものをそのうちに持っておられたということです。そして、その言葉を人間に賜ったということです。さらに、何よりも大切なこと、この言葉によって聖書というものを得て、御言葉をいただくことでできているということです。そして、私たちは神をより深く知ることができるといえるということです。

2024年も、クリスチャンである私たちは、イエス・キリストから目を離さず、御言葉から養われていきましょう。